

植民地朝鮮の都市と近代：安石影の漫文漫画を中心に

申, 明直
熊本学園大学

<https://doi.org/10.15017/2203012>

出版情報：韓国研究センター年報. 8, pp.82-82, 2008-03-28. Research Center for Korean Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



植民地朝鮮の都市と近代

— 安石影の漫文漫画を中心に —

熊本学園大学 申明直

1920年代後半と1930年代前半の「植民地的な近代」都市である京城の様々な日常生活の風景を描いていた安石影の漫文漫画に関するジャンルの特性とその美的特質について探ってみた。まず漫文漫画というのは「文」と「画」が結合したジャンルである。しかし漫文漫画を単なる「文」と「画」との「関係的構成物」でだけ理解することは、「漫文漫画」が持っている社会歴史的な性格を正確に分かったわけにはいかないのである。「時事漫画」が許されなかった社会歴史的な条件との妥協として、30年代の都会の風景を中心とした「漫文漫画」というジャンルは生成・発展してきたわけである。

安石影の漫文漫画に描かれている風景は1920年代末、30年代初の「植民地近代」都市である京城のそれである。彼は、特に、近代への誘惑を強く催促する博覧会や百貨店でそれを感じるが、同時にそれが持っている植民地的な限界を感知することもある。植民地である朝鮮での需要創出のため、日帝が行った多様な近代化政策と、それがぶつかってしまった貧弱な需要の壁に彼の関心は集中する。しかしそれだけではない。植民地的な近代秩序を維持・温存するため、一定の規律下で対象化された主体が、その規律の内面的な方式或は外圧的な方式によって懐けられていく風景を彼は形象化するのである。

対立する近代主体は明らかな何種類のコードでキャラクター化されることもある。このような現象はブルジョアを形象化する時、より目立つようになる。彼はまた別の近代主体であるモダンガールとモダンボーイのファッションと、特にモダンガールの「寄生性」を問題とする。

このようなモダンガール・モダンボーイと互いに対立する階級階層間の日常というのが置かれている場所は植民地的な近代都市「京城」である。植民地の首都である「京城」には近代と前近代が共存する空間であり、また「幻想」と「絶望」が共存する空間であることもある。これを安石影は「アスファルト」のイメージで形象化している。植民地的な近代都市である「京城」の日常はこんなに中層的である。消費空間や近代公園は言うまでもなく、映画・音楽・ダンス・スポーツ・ファッションに至るまで京城の全ての近代文化は二重的で、このような歪曲された中層性は全的に近代都市である「京城」の植民地的な性格に根拠するものである。